研　究　の　総　括

授業評価から見た研究の成果と課題

「授業評価」は、「いい授業をつくるために」というアンケート調査の形で、生徒を対象に毎年６月頃行っている。アンケートは、各教科で集計し、経年推移を含めて結果を分析・考察し、授業改善につなげている。

まず、アンケート前半は、「（生徒自身の）授業の受け方」についての項目である。回答は肯定的なものが多く、普段から学校生活の中で授業規律が守られていることが明らかになった。また、積極的に授業に参加している生徒が多いことも分かった。一方、課題として、各教科に共通している質問４にある「発言したり質問したりしましたか」に関して、他の項目と比較して肯定回答率が低い傾向が見られることが挙げられる。しかし、これを経年推移で見ると、わずかではあるが上昇傾向にある。これは、授業者が授業評価の結果を分析して、改善するべき点を意識した授業展開をしている成果である。

アンケートの後半は、「（生徒から見た授業者の）授業の仕方」についての項目である。これについても、肯定的な回答が多数を占めているものの、教科による差が生じている。例えば、最後の項目に「全体を通して授業は充実していましたか」という質問があるが、これに対し９割以上の生徒が肯定的に回答している教科もあれば、７割程度の回答の教科もあった。生徒が感じている授業の実態を明らかにすることで、授業者はその傾向を十分把握し、その原因を突き止め、授業改善のための具体的な手だてを講じることができる。

過去数年間の回答結果の経年推移も同時に出しているが、授業者と回答した生徒が同じ場合で経年比較をすると、授業者は授業の実態を数値や自由意見から把握でき、授業改善の手だてをよりよく構築することができる。また、授業者と回答した生徒が違う場合で経年比較をすると、授業者は生徒の実態を確認することができ、生徒に応じた授業改善を進めることができる。

このように、「授業評価」は、生徒にとっては授業に対する自分自身の姿勢を問い直す機会となるとともに、授業者にとっては授業の実態を把握し、授業改善のポイントを明らかにする重要な手だてとなっている。授業改善は、生徒の実態に応じて行われることが大切であり、生徒の意見を把握するところから始まるものである。今後も授業評価アンケートに継続して取り組み、学力向上に向けた授業改善につなげていく。

言語活動の充実から見た研究の成果と課題

新学習指導要領には、「言語活動の充実」が「各教科等を貫く重要な改善の視点」として盛り込まれている。全教科・領域で言語活動を充実させることは、生徒の「言葉の力」の育成を図ることであり、各教科等の目標を達成させるための手段として位置付けられている。国語科で培った能力を基本に、各教科等において、知的活動の基盤という言語の役割を意識した授業改善を図ることや、コミュニケーションや感性・情緒の基盤という言語の役割を意識した授業改善を図るというような、言語活動の充実を視点とした授業改善の取組が各教科等の目標の達成や生徒の学力向上につながると考え、本研究の手だての１つとして研究を進めてきた。

各教科等において、言語活動を充実させるための留意点として次のことがあげられる。

① 授業のねらいを明確にして指導と評価の一体化を図ること
② 言語活動がなぜ必要なのか、その必要性を教師が十分に理解し、生徒に理解させること
③ 読書活動を推進して、読解力・表現力等を身に付けさせること

これらの留意点を踏まえて、まず、全教員で言語活動の重要性を理解し、授業展開の中に必ず学び合う場面を取り入れる工夫をした。そのために教科部会で各教科の言語活動の具体例を検討し、言語活動に関する観点を教科ごとに定めた。また、指導計画に言語活動を位置付け、言語活動を充実させた授業改善に取り組んだ。

授業評価アンケートでは、具体的な言語活動の充実に関する項目を入れた。すべての教科等において、ねらいが明確にされていることや、具体的な言語活動が行われているという回答が８割を占めた。また、単元の内容に応じて言語活動を充実させた授業展開の工夫を行ったことが学習指導案にも表れていた。しかし、一部の教科等においては、教科の目標達成のための言語活動の位置付けや言語活動の具体例にさらなる工夫が必要であることが明らかになった。全教科・領域で、教科等の特性を踏まえた言語活動を充実させた授業改善を図り、学力向上に努めていく。

学力調査から見た研究の成果と課題

本研究では、授業評価とともに学力調査を行い、その調査結果を分析して授業改善の手だてを検討・実施している。学力調査の結果から、授業者は観点別学習状況の傾向や学年別の傾向を把握して、課題を解決する方策を講じてきた。

英語科を例にとると、全学年を通して４つの観点ともに国や都などの平均を上回る結果となっている。しかし、「表現の能力」の中に含まれる「書くこと」の達成度は、同じ「表現の能力」の中に含まれる他の表現活動（「話すこと」）と比べてやや低かった。そのため、全学年共通して、授業の中で意図的に「書くこと」の学習活動を増やし、表現の能力をより高めるための授業改善を行った。その後に行われた学力調査の結果では「書くこと」の観点の達成率が上昇した。他にも「聞く力を育てるためのリスニングテストの導入」、「基礎的・基本的事項の確認のための単語テストの実施」など、学力調査結果をもとにした授業改善を行うことができた。

このように、学力調査の結果を踏まえた授業改善を図ることにより、観点別に差はあるものの、全体として数値が上昇している傾向が見られ、授業改善への手だての成果といえる。

課題としては、「思考力・判断力・表現力」の達成度が他の観点に比べてやや低い傾向が見られる。例えば、数学科では、「数学的な技能」の達成度は７～８割であるのに対して、「数学的な見方や考え方」の達成度は５～６割程度にとどまっている。基礎的・基本的な知識・技能を活用した授業改善を図り、思考力・判断力・表現力等の育成に努め、学力向上につなげる。

また、学力調査を実施していない教科については、客観的な評価や資料がないため、教科の目標に対してどの程度到達しているかを把握することが難しい。教科の特性により、客観的な評価が難しい点もあるが、学力調査の方法や分析、授業改善に結びつける視点を課題として、研究を進める。

読書活動から見た研究の成果と課題

国語科における課題図書の選定では、生徒が読書好きになる本・新たな発見を見いだせる本・ぜひ今の時期に読ませたい本など様々なジャンルの本を読めるように留意している。教職員・保護者・生徒による「推薦図書」の小冊子は、生徒の本への関心を高めることにつながっている。特に生徒同士で本を紹介し合う場面では、互いの意見を聞き合うことが、自然に読書意欲の高まりにつながっている。

国語の授業では、こうした読書活動を基盤として課題図書の小説全体の読み取りをしたり、童話の読書会をしたり、本一冊を学習に活用した授業を展開している。読書単元の授業では、本の紹介スピーチや読書記録の授業にとどまらず、「比べ読み」など様々な形の授業が考えられ、「読む力」、「書く力」、「話す力」、「聞く力」など幅広い力が身に付いてきている。

10分間の朝読書が定着しており、休み時間にも本を広げる生徒が多い。環境を整えることも重要であるので、年々図書室や学級文庫が充実していることも生徒が読書に興味をもつきっかけとなっている。読書アンケートによると「読書の時間を延長してほしい」と希望する生徒も多数いて、積極的に読書に取り組む生徒が増えてきている。また、年間に読書している本の冊数も年々増加傾向にあることは大きな成果である。

学校全体で読書活動に取り組んでいることは、国語だけではなく、他教科においても成果として表れている。読書は言語能力を育てる上で核となるものである。読書活動は、生徒が表現する内容を豊かにするための手段であり、すべての教科の授業における言語活動の充実につながっている。更に言語能力の向上を図ることは、学力向上に直結するものと考える。今後も、読書活動において基本的な内容を明らかにすると同時に、必要な指導過程を提案し実践を積み重ねていく。